

コメニウス——二十一世紀から見た「近代教育の父」

大阪教育大学教授 宮野 安治

二十世紀に身を置いていた当時のわれわれからすれば、二十一世紀は異次元の世界のようにも思えたが、新世紀への移行は、現実には事もなげに行われた。しかしそれは、前世紀の諸々の重い課題をそのまま抱えての移行でもあった。

このことは、当然のことながら、教育についてもあてはまる。世紀末の喧噪の中で、教育は、一方では、情報化や国際化や環境問題等への対応を求められるとともに、他方では、いじめや不登校や学級崩壊等の解決を迫られるという状況にあった。が、事態は必ずしも進展を見ず、課題はそっくり二十一世紀に持ち込まれてしまった。

それどころか、「教育の危機」「教育の荒廃」ということが、今日依然として、場合に

よればこれまで以上に、声高に叫ばれている。新しい世紀を迎えたものの、「教育」や「学校」に希望や光明を見いだすのは、さこぶる困難といわなければならぬ。

もし現代教育が袋小路に陥っているとすれば、その打開のためにわれわれがなすべき第一歩は、現代教育、つまりある意味では近代教育の延長線にある現代教育の原点に立ち返ってみることであろう。そうしたとき、近代教育を築き上げた人物の中で、まず真つ先に浮かび上がってくるのが、「近代教育の父」と称されるコメニウスにはかならないのである。

流浪の生涯

ヨハン・アモス・コメニウス（チェコ語で

はヤン・アモス・コメンスキ）は、一五九二年にチェコのモラヴィアに生まれ、一六七〇年に亡命先のオランダのアムステルダムで亡くなった。彼は、死の少し前に、「私の生涯は遍歴であった。私はどこにも故郷を持たなかった。それは憩うところのない絶えざる流浪であった」と書いたが、彼の生涯はまさにこのことば通りであった。

幼くして孤児となった彼は、ボヘミア同胞教団のラテン語学校に入り、そこを卒業して、ヘルボルン大学およびハイデルベルク大学で学んだ後、まず母校のラテン語学校の教師に、その後同胞教団の牧師に任じられた。一六一八年にコメニウスは、モラヴィアの東北部のフルネックに移り、牧師職を兼務しながら、教団付属の学校の校長となったが、こ

の年にかの三十年戦争が勃発したのである。

ドイツをはじめヨーロッパ全土を巻き込んだこの三十年戦争は、キリスト教内の旧教と新教の対立を背景にしたもので、コメニウスの属していた同胞教団は、新教のフス派の伝統を受け継ぎ、旧教のハプスブルク家の支配に抗し、チェコ民族独立の運動を展開していた。このために、コメニウスは、旧教勢力の圧迫の中で、数年間の国内逃亡を経て、ついに一六二八年にポーランドのレシュノに亡命せざるをえなくなった。

その後の彼の人生は、イギリス、スウェーデン、ふたたびポーランド、そしてオランダと、憩うところのない「絶えざる流浪」であった。しかしその間、ハートリブ、ミルトン、デカルトといった人たちと交わり、全知識を統一化する「汎知学（バンソフフィア）」を構想する一方、社会改革や学校改革に意欲的に取り組むと同時に、『開かれた言語の扉』（一六三二年）、『大教授学』（一六五七年）、『世界図絵』（一六五八年）、『光の道』（一六六八年）等の著作の筆を執った。

その略歴からも直ちにわかるように、コメニウスは実にさまざまな顔を持った人であった。だが、戦乱と混乱の時代を生きた彼が究極的に志したことは、「人類全体の救い」であったといえる。そして、そのための手段を彼は「教育」に見いだしたのである。その意味で、彼の教育学的主著である『大教授学』

は、単に「教授」（知識や技術を文字通り教え授けること）の技法について論じるところとどまるのではなく、人類全体の教育という包括的な視点に立っていたのである。

人間の教育必要性

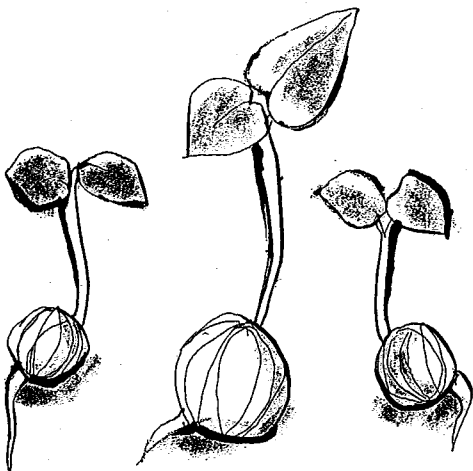
では、コメニウスは教育をどのように考えていたのか。そもそも彼によれば、他の動物と比較して人間の優れた点は、「知識」「德行」「信仰」というところにある。こうした「知識」「德行」「信仰」は、人間自身に「自然的」に内在している。この点で、コメニウスは「人間の精神」を「植物の種子」になぞらえる。すなわち、植物が、種子の中に、その将来の姿を萌芽的に宿し、蒔かれた種子が、芽を出し、花を開き、実を結ぶように、人間の精神も、あらかじめ「種子」としてあるものが、内部から「自然の力」によって成長し、姿を現すというわけである。

けれども、コメニウスは人間をなすがままに任せればよいとは考えない。なぜならば、与えられているのは、「知識」「德行」「信仰」の「種子」であって、「実」そのものではないからである。果樹は、放っておけば、野生の実しかつけない。やわらかな、甘みのしたたる実を結ぶには、果樹園で育てられなければならない。そのように、人間も、放っておいても人の姿になるかもしれないが、「理性」をそなえ、知恵を持ち、得に溢れる、敬虔な

動物」に育つことはできない。

これを証拠づけるために、コメニウスは、「幼い頃に猛獣にさらわれその間で育てられた人間」、いわゆる「野生児」の例を持ち出し、「人間は、もしまことの教育によって温和にされるならば、最も柔和な・最も神に近い動物である。なんの教育も受けず、あるいは誤った教育を受けるならば、地上に生じる・すべての動物のうちで最も凶暴なものとなる」（鈴木秀勇訳『大教授学Ⅰ』八五頁）と述べるのである。

いってみれば、「種子」である人間は、いまだ生物学的な「ヒト」にすぎない。この「ヒト」が人間性を身につけた「人間」となるために、ここに「教育」が必要となってくる。だからコメニウスは、「教育されなくては

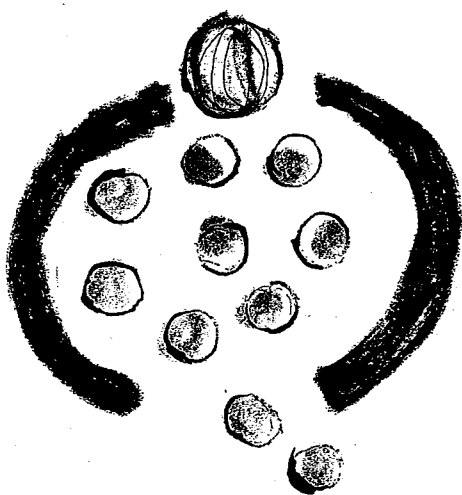


は、人間は人間になることができないのであります」(『大教授学1』八一頁)と高らかに宣言し、人間を「教育される動物」と呼ぶのである。

後に例の哲学者のカントは、「人間は教育されなければならない唯一の被造物である」「人間は教育によってはじめて人間になることができる」と語り、またさらに、現代教育学においては、たとえばオランダのランゲフェルトあたりは、人間を「アニマル・エドゥカンドゥム(教育されなければならない動物)」と規定している。いずれにせよ、人間を「教育的動物」として押さえることは、極めてモダンな視点であるといえるが、その視点は、やはり「近代教育の父」コメニウスにおいてすでに用意されていたと見ることができるのである。

学校と教授法の改革

人間の教育必要性を認識したコメニウスは、そうした教育を実現する場を、「青少年はやはり集団の中で、一緒に教育を受けるのが、本当です」として、「学校」に求める。その点で、「学校」は「人間を本当の人間にする」ところであり、「人間の製作場」である。しかもその場合、近代的な国民哲学の理念を先取りして、「金持の子弟や身分の高い者の子弟ばかりでなく、すべての子弟が同等に、つまり貴族の子どもも身分の低い者の子



どもも、金持の子どもも貧乏な子どもも、男の子も女の子も、あらゆる都市、町、村、農家から、学校へあがらなければなりません」(『大教授学1』九八頁)とされるのである。

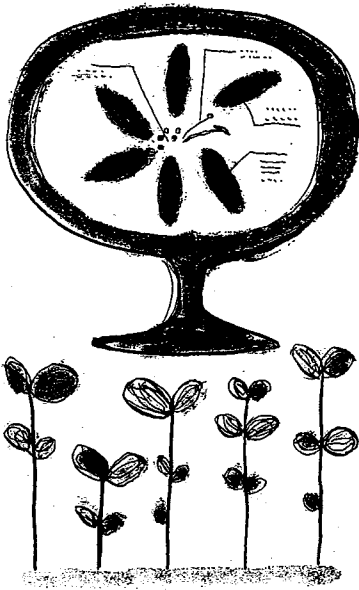
このように、コメニウスにとっては、学校では、まず「あらゆる者」が学ばなければならないのであるが、これに彼はさらに付け加えて、学校では、「あらゆる事柄」が学ばなければならないとする。もっとも、「あらゆる事柄」といっても、何もかもということではなく、それは、「現世と来世とで出合う・重要な事柄のすべて」を、つまりヒトが人間となるために重要な、かの「知識」「德行」「信仰」にかかわる「あらゆる事柄」を意味している。

がしかし、コメニウスの見るところ、「あ

らゆる人があらゆる事柄を学ぶ学校」はいまだ存在していない。それどころか、現実の学校は「子どもたちの折檻場」「知能の拷問室」となっている。そこで、学校を人間形成にふさわしい場へと改革しなければならぬことになるが、それにあたっては、とりわけ「教授法」の改革が必要とされる。「あらゆる人にあらゆる事柄を教授する・普遍的な技法を提示する」ことを謳った『大教授学』は、まさにこの課題に応じようとするのである。

コメニウスは教授法の基本原理を、近代の多くの教育思想家がそうであつたように、「自然という教師」に求め、これに基づいて、教授が「的確に」「平易に」「着実に」「敏速に」行われるための三七の原則を掲げ、さらに「知識」「德行」「信仰」の教授法について各論的に論じている。「教授法」の問題は、コメニウスの教育論の中核をなすもので、また彼のオリジナリティが最も発揮されている部分であるが、ここではその詳細に立ち入ることは差し控えて、二つばかりの特徴点を指摘するにとどめたい。

そのまず第一は、コメニウスが、「事物そのもの」より先に「言葉」を教える従来までのやり方に反対して、「認識はいつも必ず感覚から始まらざるをえません」とする「感覚論」をベースに、感覚ないし直観に訴えるいわゆる「直観教授」の原理を強調しているという点である(「視聴覚教育」はこの原理を



人類全体の視点に立つて

現代に生かしたものである。そして彼は、この原理を単に理論的に掘り下げるだけでなく、それを実践的に具体化しようとした。すなわち、世界で最初の絵入りの教科書とされる『世界図絵』がそれである。

それからもう一つは、教授組織にかかわることであるが、教師が子どもを一人一人別々に教えるというそれまでの「個別教授」に対して、「学級」を単位にした教授を唱えているという点である。現在では、学校教育が「学級」を単位としているのは自明であり、「個性化」「個別化」あるいは「学級崩壊」等の中で、むしろ逆にその存在が改めて問い直されているほどである。けれども、「学級」組織の登場は比較的新しく、一般的には、コメニウスあたりがその必要性を最初に説いたとされているのである。

以上、コメニウスの教育論について概観したわけであるが、その全体を貫いているのは、今一度繰り返せば、「人類全体の救い」という視点である。二十一世紀のわれわれから見れば、いかに「近代教育の父」であるコメニウスといえども、やはり「時代の子」で、様々な問題や限界を内蔵していることは否めない。しかしながら、それを越えて、もしわれわれが彼から学ぶべきことがあるとするなら、それは、彼の教育論の根底にあるこの「人類全体の救い」という視点、今日的にいえばグローバルな視点ということになるだろう。

もっとも、そうはいっても、コメニウスは最初からこのような視点に立っていたのではない。すでに触れたように、彼は元来は祖国の解放と独立を悲願とする熱烈なナショナリストであった。しかし、ハートリブ等のイギリスの平和主義者との交流を通して、また、三十年戦争の動乱の中でヨーロッパ全体の平和を希求することによって、彼の視野は、「民族」や「祖国」に限定されずに、「人類」や「世界」へと拡大して行った。

この視野の拡大については、たとえば『大教授学』の成立がこれを象徴的に物語っている。というのも、この『大教授学』は、チェコ語の『教授学』のラテン語バージョンとして書かれたものだったからである。すなわち、祖国人のために母国語で書いた『教授学』を、コメニウスは、後に人類のために、当時の国

際語であったラテン語に書き直したのである。『大教授学』の「大」という語の持っている意味は重いのである。さらに加えて、「汎知学」の構築や「普遍的言語」(国際語)の構想といったことも、世界主義者・人類主義者としてのコメニウスの側面を示しているといえよう。

二十一世紀、人類は果たしてどこへ向かうのか。コメニウスが生きた戦争と混乱の世界か、あるいは、コメニウスが夢見た平和と秩序の世界か。ともあれ、彼がいうように「人類全体の救い」が「教育」にかかっているのであれば、今われわれは彼のまなざしを持って教育を見つめなければならないのではないだろうか。

参考文献(現在ある程度入手可能なもの)

◇コメニウス著、鈴木秀勇訳『大教授学1・2』明治図書出版、一九六二年。

◇コメニウス著、藤田輝夫訳『母親学校の指針』玉川大学出版部、一九八六年。

◇コメニウス著、井ノ口淳三訳『世界図絵』ミネルヴァ書房、一九八八年。

◇堀内守著『コメニウスとその時代』玉川大学出版部、一九八四年。

◇藤田輝夫編『コメニウスの教育思想』法律文化社、一九九二年。

◇井ノ口淳三著『コメニウス教育学の研究』ミネルヴァ書房、一九九八年。